

〈修士論文要旨〉

江戸時代の東海道における旅と一里塚の史的研究

* 村 田 道 代

江戸時代に行われた街道整備において設置されたもののなかに「一里塚」がある。一里塚とはその名からも連想されるように、街道においてある基点から一里ごとに築かれた塚であるといわれており、主要街道におけるその基点は江戸の日本橋である。

一里塚の成立については、この制度の起源が中国にあるとの見解がなされており、黒板勝美氏は主要街道以外にも一里塚が築かれていたことに注目し、その例として奈良県に存在する一里塚を取り上げ、一里塚の前身が高野山の町石にあることを述べている。一里塚に関する研究はごくわずかであるが、その中でも主として交通史の中で行われてきている。その成果として児玉幸多氏が一里塚の役割を①旅人が距離を知るための目安②駕籠の値段の目安③街道における休憩場、として位置付けており、現在はその見解が一般的なものとなっているが、一里塚の実態については植えられた木のパーセンテージが明らかになっているだけであるといえる。そこで、本稿では江戸時代の東海道を中心としてそこに築造された一里塚の実態を明らかにするとともに、江戸時代の旅と一里塚との関係についての考察を行った。

第一章では東海道全体の里程と一里塚との関係を考察した。第一節

では東海道全体の里程を明らかにするために「東海道宿村大概帳」(以下「宿村大概帳」天保十四年(一八四三)の調査)に記載されている里程に誤りがあることを指摘し、結果、「東海道分間延絵図」(以下「分間延絵図」文化三年(一八〇六)と同様の里程が確認できたことから、江戸時代後期において幕府が示した東海道全体の里程は「百二十六里八町一間」であるとした。第二節では里程に関して「東海道名所記」(万治三年(一六六〇))、「東海道分間絵図」(以下「分間絵図」元禄三年(一六九〇))、新版東海道分間絵図(宝暦二年(一七五二))、「東海道名所図会」(寛政九年(一七九七))、「分間延絵図」、「宿村大概帳」の以上六つの史料から、記載されている里程を比較し、各史料によって里程は異なるものであるとした。また、「東海道絵図」(天和年間(一六六一〜一八四))では「百二十里」とされていた里程が、「分間延絵図」では「百二十六里八町一間」となっており、約六里の差異が生じているその要因として、街道の付替えによる里程の変化以外に、江戸時代前期から中期の史料に関しては「七里の渡し」以外の船渡しの部分の里程を省略する傾向がみられるため、東海道全体の里程としては百二十里前後の里程になっており、それ以降ではそ

の部分の里程が含まれるようになることから、江戸時代後期になるにしたがって百二十六里前後の里程がみられるようになったことを各史料の里程比較から読み取ることができた。

一里塚に関しては「東海道絵図」、「分間絵図」、「新板東海道分間絵図」、「分間延絵図」、「宿村大概帳」の以上五点に記載される一里塚を比較し、その築造場所にあまり変化がみられないことから、幕府が先述した「六里」の里程変化にともなう一里塚の新たな築造を行っていないのではないかと考え、江戸時代初期の一里塚と後期の一里塚では同一の一里塚であってもその示す里程は異なるものであるとした。

第二章では具体的に一里塚の例を挙げて一里塚の移動と築造に関して考察した。考察した一里塚は現在の静岡県内に築造された一里塚で「大諏訪一里塚」、「原一里塚」、「岩淵一里塚」の三ヶ所である。第一節では大諏訪一里塚と原一里塚について自身の作成した表から「新板東海道分間絵図」以降、一里塚の記載があることに注目して、一里塚は街道の付替えによって新たに築造され直されるものであったとした。第二節では岩淵一里塚について「分間絵図」と「分間延絵図」からその移動を確認したが、前後の一里塚（本市場一里塚と蒲原一里塚）の移動がみられなかったことから岩淵一里塚は一里塚として正確に機能していないことに加えて、実測結果からも一里塚間の距離の曖昧さを指摘し、一里塚は厳密に一里ごとに築く必要はなかったものであるとした。

第三章では江戸時代に書かれた道中記に一里塚の記述が見えないこ

とから、旅人にとって一里塚の存在はあまり重視されていないかだったのではないかとこの視点から、当時の旅と一里塚の関係について考察を行った。第一節では一里塚の成立について再度整理し、一里塚が江戸時代において制度として確立したことを確認した上で、第二節で一里塚の実態をみていった。当時の街道図や現代の発掘調査などから、一里塚は必ずしも五間四方の形式をもって築造されておらず、形状は様々であり、植えられた木に関しても統一はされていないことから、一里塚築造に関しては特に規定はなかったと考えられる。また、発掘調査から一里塚の内部の状態が明らかになり、ただ塚に木を植えただけのものではなく、その内部にはしっかりと石を敷き詰め、塚が崩れない工夫がなされていたことから、当時の人々の技術の高さを窺うことができた。第三節では江戸時代の人々と一里塚の関わりについて考察した。具体的には当時詠まれた一里を題材にした川柳や、一里塚付近の地名などから、人々の中に一里塚に対して里程イメージはなく、むしろ自分たちにとって身近なものとして捉えられている様子を窺うことができた。第四節では旅と一里塚の関係について考察した。まず、一里塚の築造場所に関しては、両側に築くことによる旅への利点がみられないことからあえて両側に築く必要はなかったといえる。さらに、一里塚には里程に関する情報を示すものが立てられていないことから、道中見落とす可能性があることに加えて一里塚が築造されていない場所などがあつたことから、旅人にとっては正確な距離情報とは成り得なかったと考えられる。つまり、当時の旅人たちは旅の進めてい

く上で一里塚を距離情報として利用していないと判断し、結論として距離情報として利用していたのは宿場間の里程であったのではないかという見解に至った。